

連城亭隨筆

特別  
14  
696  
183



連城寺隨筆 卷七 篇七

增  
696  
183

696  
183

連城亭隨筆拾七編卷之七

尾陽

中守廣弘法

○吉野志見 若山史生

寛永の尾陽田の城を弘法法師が安元築

の跡に中守有之 彦也の八幡の末に我と申

此の地を金と云ふ

彦也の末に我と申

彦也の末に我と申

○日耳曼國の古事書抜がせり新

氣志の冷の長ヲ記

象ハ 百孝年を成る末と云ふこと

駿院ハ 五十年の月六十年

驪馬ハ 之を云ふ







記宮監濱野之事

濱野者尾張藩士山澄義清女也資性英敏仕于  
後宮為阿監嘗有傳語于宮中每至夜半聞紡聲  
在某舍閣上是老狸所為焉宮人皆怖莫肯居其  
舍者濱野憂之及時挾匕首坐閣偵之良久而不  
遇怪意謂渠知我在而避之也乃降閣而潛聽少  
頃紡聲低起以漸高且急濱野踟躕而升就聲直  
刺之似有羣鼠跳來乃呼人燃燭而視之無有他  
異矣於是宮人皆知聲之由鼠而不復怖且深服

濱野之澹勇云  
或評曰如濱野則謂之女中之小忠盛亦可

○日涉集卷之十有月物卷之七全

放情在壺  
車  
壺  
壺

畫什畫文房具等并觀  
皆圖  
半截畫

為考眉壺  
之  
壺  
壺









山色石  
砂

學年

之川國設示部

下津貝村

柿之丸

山有之也

● 以邑

同國同郡

長江村

日陰地有之

地主

原田長次

父 原田富貴

● 以邑石

之川國設示部

小林村中田

有之也

● 以邑石

同小林村

長江村境

切二山有之也

石 以邑

是ハ 長江村  
木葉付 日陰山

砂 以邑

是 同  
原田長太 扣山  
有ハ也

同人  
原田富貴

ハハ南中ハ也

○木葉史夏補

柳藏下 近名限 從六月朔 至七月朔

皆登子年 且今雖藤中 且重官許 澄空家 故事

多早天册 中有行方 宜好也者 先導諸人

上此項 津逢 而三免 今有 其海 且山下 地村 亦

建此 像 以 另 如 道 祖 人 宜 取 尾 川 小 田 井 村 亦

本 後 亦 有 二 三 故 三 四 諸 本 下 八 始 終 是

○三 知 折 續 後 亦 仲 也  
十二 由 乃 亦 凡 亦 有 乃 也

我 亦 知 乃 亦 終 由 乃 亦 凡 亦 有 乃 也

































中よりこれ今も心を修むるは是を以て善と云ふべし  
修むるは善と云ふべし修むるは善と云ふべし

○修むるは善と云ふべし修むるは善と云ふべし  
修むるは善と云ふべし修むるは善と云ふべし

○修むるは善と云ふべし修むるは善と云ふべし  
修むるは善と云ふべし修むるは善と云ふべし

此の修むるは善と云ふべし修むるは善と云ふべし  
修むるは善と云ふべし修むるは善と云ふべし



○長國大徳の年をたぬ  
○熱田の公の存念の類  
○深草の心儀のく香齋の人の人あつて  
○香齋の客の拾理の意に信すもたり  
○拾理の女神の言はぬ家の人あつて  
○香齋の客の拾理の意に信すもたり  
○拾理の女神の言はぬ家の人あつて

○長國大徳の年をたぬ  
○熱田の公の存念の類  
○深草の心儀のく香齋の人の人あつて  
○香齋の客の拾理の意に信すもたり  
○拾理の女神の言はぬ家の人あつて

○長國大徳の年をたぬ

○熱田の公の存念の類

○深草の心儀のく香齋の人の人あつて









とをきまうしをてし 然る者い存理人義義利り  
人々其の如く或はふりたてし

花如の異つを 稽翠第証

任事山田も 艶女志別其相も 七もをい 這六  
いふやうにさうさうとさうさうといふ海も 道にさうさう  
致せぬ海もさうさう海もさうさう海もさうさう海もさうさう  
和のさうさう海もさうさう海もさうさう海もさうさう海もさうさう  
上サしめさうさうヤカトさうさう海もさうさう海もさうさう海もさうさう  
有るさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
奇泊めさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
婦ゆめさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

是の文語存の如くは 花如の宿女といふより 史臣  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
○ 是の若さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

○ 三河山田海野守休所さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
此語山人 祐号元年

仙函新

木衣年道執心許 客早水可  
才毎ちさうさう





思ふ  
世に  
心算の心

○東進願書  
伊勢皇太神宮式事正遷宮の定まりの年し  
天皇御代 天武天皇御代 勅命ありし  
造者有し 皇祖神代 今上皇御代 一千百  
餘年と及ぶと云列の違ふ年限を守りて  
更し意する年 既住あり宮の年例の因り  
造宮の 勅命ありし 山に祭勤行し  
伊勢川南垣四行別宮ありしこと 經理管其の  
可いから 將 来しこと 因年より 新感

御意成り上奉遷の 初後奉向志  
宜吉の日時 奉遷使政事 正徳御代  
神祇の次第を 園苑 錦の上益海垣  
作障 遷の天の御意 日の御意と 臨奉  
朝 奉遷の 種々の 神意 捧り 御遷奉  
の 祈後 陳列 敷木の 上は 遷奉 奉の年  
を 定 神祇 神祇の 知行 此奉 奉の年  
宮の 天村 遷奉 四年 世の 高南 度會 四門  
人 遷奉 朝 奉 權 在 宜 殿 補 せ 凡  
御宮の 崇 爵 前 後 後 度 の 祭 祀 以  
奉 仕 奉 遷 奉 遷 奉 奉 遷 奉 遷 奉  
の 官 齋 齋 位 取 の 備 官 奉 遷 奉 遷 奉



六〇

日長公のむすこありて名を長房とて駿河の國に在りて其の

七〇

河村金辰

八〇

河合一豊

九〇

深田一盛

一〇〇

龍夏彦

六一〇

高木有傳

六一〇

鈴木服

六一〇

馬場守信

六一〇

菅原重孝

六一〇

小澤重孝

六〇

人の世は富はひ多き事少くはたの風も月もあまらざる

七〇

田中寅亮  
あはれなるはあはれなるかしの世のいふ支なりとも我は来り

八〇

間嶋山興  
あはれなるはあはれなるかしの世のいふ支なりとも我は来り

九〇

植松有因  
あはれなるはあはれなるかしの世のいふ支なりとも我は来り

一〇〇

植松有因  
あはれなるはあはれなるかしの世のいふ支なりとも我は来り

一〇〇

本多春兼  
あはれなるはあはれなるかしの世のいふ支なりとも我は来り

一一〇

老翁のうらみありは花のほろろをよりのあはれなる

一二〇

園田高頼  
あはれなるはあはれなるかしの世のいふ支なりとも我は来り

一三〇

篠村千春  
あはれなるはあはれなるかしの世のいふ支なりとも我は来り

一四〇

水楚元機  
あはれなるはあはれなるかしの世のいふ支なりとも我は来り

始に於て山中の松の心せきをあはれん心をうきよるを

大節高川

初に於て松の心せきをあはれん心をうきよるを

青山守流

先づ此のあはれ心をうきよる月あはれん心をうきよる

津田山生

そとに於て松の心せきをあはれん心をうきよる

内田成之

霧あはれん心をうきよる月あはれん心をうきよる

花井重雄

三〇 袖野景遠  
そとに於て松の心せきをあはれん心をうきよる

三〇 か藤嶺是  
そとに於て松の心せきをあはれん心をうきよる

三〇 物への根の心せきをあはれん心をうきよる

三〇 聖口道直  
そとに於て松の心せきをあはれん心をうきよる

三〇 神谷承平  
そとに於て松の心せきをあはれん心をうきよる



雪のふりやあやふくしきつらき雪のふりやあやふくしきつらき

五〇

此五意の

深き水に身をまかせしはなほ深き水に身をまかせしはなほ

六〇

増如雲

小舟のちかき水に身をまかせしはなほ深き水に身をまかせしはなほ

七〇

木村子齋

月はさかれば影は長しとてさかれば影は長しとて

八〇

傍全幢

山崎某のてらあるはなほ深き水に身をまかせしはなほ

九〇

深田宗信

四〇

宮田敏

深き水に身をまかせしはなほ深き水に身をまかせしはなほ

五〇

近松茂知

子鳥

深き水に身をまかせしはなほ深き水に身をまかせしはなほ

六〇

徳女

秋風をよみてはなほ深き水に身をまかせしはなほ

七〇

神三昌海

秋夜

四〇

佐々木庸綱 浦月

舟より載るる由を尋ねて以て其の浦の舟

四〇

栗田直政

舟の浦の水を引きて舟を動かす事ありて其の浦

三〇

奥正邦 月前柳

あはれなる浦の浦の水を引きて舟を動かす事ありて其の浦

三〇

吉田政長

若代に於て舟を動かす事ありて其の浦の水を引きて舟を動かす事ありて其の浦

三〇

小出教一 元日

舟を動かす事ありて其の浦の水を引きて舟を動かす事ありて其の浦

三

小林仲治 初雪天

舟を動かす事ありて其の浦の水を引きて舟を動かす事ありて其の浦

二

富田道彦 待春

舟を動かす事ありて其の浦の水を引きて舟を動かす事ありて其の浦

二

鏡島白鵬 春の風流

舟を動かす事ありて其の浦の水を引きて舟を動かす事ありて其の浦

二

河田九右衛門

舟を動かす事ありて其の浦の水を引きて舟を動かす事ありて其の浦

津田虎宗 元旦

舟を動かす事ありて其の浦の水を引きて舟を動かす事ありて其の浦

二



柳生述也

其の... 柳生述也

其の... 柳生述也

其の... 柳生述也

其の... 柳生述也

其の... 柳生述也

六 六 六 六 六

三教の教の傍

鈴木娘

幸海原舟あつて未だ大義の印成らざる文の印

水室

三浦長考

其の... 三浦長考

い

西郷輝光

其の... 西郷輝光

七

増徳屋

其の... 増徳屋

七

徳中

其の... 徳中

七 七 七 七 七

夏目を花洞布を 悟悟山の事

夏目を花洞布を 悟悟山の事

申方子舟の事

申方子舟の事

春の事

春の事

松平元重

松平元重

松平元重

松平元重

遠城山圖

知公

知公

知公

知公

知公

知公

知公

遠城山圖



略傳

一 靜子

初琴姬，後雜姬。政，淳平大弼勝，富，女。

宗，據，御，養，子，子，二，迎，衛，左，大，臣，基，前，子，夫，又，子。

基，前，子，亮，政，殿，三，年，後，弟，長，明，三，子，雜，出，院。

卜，孫，之，死，死，四，年，未，七，月，其，不，盡，心，以，葬，大，德，寺。

二 鈴木重隆

丹後守，信，末，山，子，子，本，為，老，臣。

三 山澄豐歌

若，右，近，初，右，藤，重，高，果，子，秀，真，公，孫。

次，子，也，山，澄，豐，尚，經，以，子，養，子，子，本，為，老，臣。

北歌秀河の字樹特と書しり。

子賢信号(字)有邦孫應八号相川、越智氏

本為世臣世、再將長子、信之權、同左

ト元明治辰東征、隊長ト北歌の令陣中

ニテ誅シタリ

(五) 河村秀根(字)有傳孫復、号有菴、秀根

弟也、新辟サレテ世子ト得、後閑散、為

為人質直嚴正、古人凡ク博覽強記、本

邦ノ典故ニ悉ク、宣政四年壬子、六月、没、年七十、著述

書、卷今世刊布、有書紀、集解、其云

六 河村秀雄(字)有雄、北歌松野魁望、弟、

等、竟、敬、存、説、アリ、ト云

河村有根(孫)培、号乾堂、律菴、秀根、次子、

知シテ、尔、凡、園、田、新、川、ニ、延、字、ト、長、シ、テ、莊、重、敦、實、知

見人、過、シ、學、和、漢、日、無、秀、詩、律、精、シ、和、歌、父、泉

家、向、ニ、學、シ、又、書、法、精、リ、政、業、第、ニ、善、シ、文、政、二、年

己卯、上、可、受、年、六、十、四、北、歌、子、日、之、号、ト、題、シ、テ、録

河村一叢(号)子未考、本、播、世、臣、家、傳、統、人、也、北、歌

年、久、シ、ク、其、名、も、不、レ、知、ル、也、其、を、因、リ、

以、テ、之、ヲ、ト、シ、テ、名、ス



深田正盛 字子謙号九皋 和歌乃其宗 審實乃正盛  
 本藩世官為人聰敏實德有識有諸職其  
 歷參政乃先德史記傳之詩文和歌ヲ喜久  
 享和二年壬戌七月十二日薨年七 此歌ハ世子忠  
 別館遊學乃其詩乃其紅葉下云題ニテ寺山  
 俊章ト其詩ニ云ク

花

夏蔭

景樹乃人ノ夏蔭ノ題トス

高木秀隆

字子龜 和歌乃其宗 本藩ノ世官近侍  
 ツト云皇女乃神道ノ坊尾春共乃其蘊奥

極々 和歌ハ其野宮被仰 川ノ字乃其入道ノ諱乃其  
 此哥ハ其 在長調三首ノ一也 椿者乃其

鈴木服

字ハ叔清号 離屋 和歌乃其 學和漢乃其

初祿仕ニテ小英乃其年七十二ニテト 明倫堂教授  
 擢乃其始乃其 日本書紀ニ其傳ニ講ニ 天保八年ノ自  
 六月乃其致事乃其

馬場好信

和歌乃其 本藩世官

船葉重厚

通稱

本藩世官ノ 吟詠乃其村師

門ニ其乃其 北歌撰乃其 爲其乃其 褒詞

小澤盧菴

初教乃其 云仲乃其 乃其 竹腰乃其 乃其 臣也

故より仕辭之京入和哥ヲ冷泉為村師ノ門子後  
故有之川ヲ絶たんレリ一室ノ氣神ヲシテ長城邑ニ隱  
拙ク當好之京師ニテ地中笑王ヲ稱セラル人四王、澄月、若菴、慈地、高麗

此歌ノ門人ノ豪富ニメ各在留ナル者ニ布セル

田中寅亮ノ稱重之氣後儀兵衛ニ改メ檀園ト号メ仕ヘテ  
近侍ナル後先手物頭ニ憑メ儲今ノ文部太輔安政七年庚申

正月廿二日致學九家

間島正盈 稱安四郎、本居世居 天性和歌ヲ善シ

其詞凡ナラヌト云 此歌ニ夜持長ノ題トシ

間島正興 稱高島正、正盈ノ子也

九

植松有園

稱為次、茂岳ノ長子也

廿

植松有慈

稱為桂上郎、茂岳ノ次子也

廿

本多春兼

号霞菴

廿

園田高穎

稱少治、本居氏ノ山石園田其ノ養子ナル本居ノ

世居ノ性強キ和漢ヲ通シ嘗テ國教教授トナリ

國學教授トシ兼

廿

磯村子春

稱鐵強、本居世居

廿

大島孝範

稱六右衛門、本居世居

廿

水野元枝

稱清次、致仕ノ松原ト号ス

廿

大籠高升

稱佐市、号清庵、海東郡木田村人

年四十過京師入一條家三侍為入滿酒前廣類氣  
概アリ則崇本居宜長受醫術本吉田雲見ニ學  
又古器書画ヲ愛玩シテ寢食ヲ忘ル其名四方傳播  
天保十一年己亥十月月家ニ病歿年七十四其歌集  
清蘆集ト云卷ノ出村竹洞ニ三序ノ

芒

青山守流 美濃守 孫受知郡星崎牛毛村至初

神職ノ老筆及テ家事ヲ嗣子付ニ八事村ニ居テ  
結テ幽栖々年九十有餘ニテ歿ス

共

津田正生 孫三轉出海東郡根高村ノ人農家ニメ

造酒ニ業トス老後家事ヲ其子承テ直村西ノ

共

内田成之

孫源兵衛家号ノ高家也

花井重郷

孫合部左衛門

神野景遠

字志寧後改子宏号菊莊孫善左衛門傳

自家涉兵法書画ヲ壽歌醫術律曆ヲ撰史野集ニ

至ルテ通知七弁以上又佛學ヲ好ム八宗ノ要ニ目ヲ撰リ

殊ニ台密ニ系ノ角ヲ極ム嘗テ二代藏經ヲ閱シ六年ヲ

業ヲ卒ムトシ天保十一年庚子七月廿日歿年七十二

加藤鐵是 孫右衛門七郎孫後壽作ト孫又河也



僧慈明

字令快城南長壽寺高家ノ子其家頗富アリ慈明十歳ニテ自ラ發起シテ出家セシメ父ニ乞フ父不許メ云汝年日甚ク為テ嗜メテ魚ヲ嗜ム者ハ増トナルモ其道ヲ修シ得ルニ妨アリト慈明是ヲ聞キコシヨリ自ラ苦ヲ為テ食セズ遂ニ柳原長壽寺ニ投シ實戒律師ニ剃度ヲ乞フ年十ニテコシヨリ持齋堅固ニシテ沙弥戒ヲ受ケテ數年ノ後三井寺ニ入リ敬修律師ニ感テ比至戒ヲ受ケテ和メ熱田妙法院ニ住ス後知多郡内海津村ニ高齋寺ニ轉住ス今觀ニ此寺ニアリ

僧如雲

小田井村親王寺ノ住僧ナリ

末村千齋

何レノ因ノ入ナリヲ知ラズ此年ノ比尾張ニ來リ若古屋ニ住シ和歌ヲ以テ業トス不可得ト号メ

嘗テ芝山持叟ノ師トシテ學ブト云此年ノ別八十歳許ニ及ス

僧全道

熱田妙法院ノ住僧也此數東海道

壇光坂ニテ詔ルナリ

深田宗信

深田氏第ニ世正清字晉甫号明季

孫宗信第三世正倫字藤卿号慎齋此清藏後改宗信此二人ノ村何レナリ



木道を傳へ門人多く嘉永六年癸丑正月  
十七日於橋本真守宗是子

栗田直政 通稱北後海東郡砂立村

舊祠人

栗田直政 通稱要中津邊世豆山志津教仕

吉田政長 通稱左邊坊本津邊世豆山志津教仕

安政六年己未六月政年四九

小出敬一 通稱定吉号政升海東郡一為村舊里三

今津邊の別名を別當と稱し海東郡一為村舊里三  
の舊祠を文入今津邊と稱す

辛

小林仲治 通稱八五

三

富田道彦 通稱部号津邊中受部部八事村

八幡祠の神祇音波山と稱す任す神道の古

義と云ふ清直の 喫茶を樂とす

妻數の後裔は自體恬とす世事は意也

元治元年甲子六月 政七十六

鐘島白鷗 通稱要熱田祠の神樂を奉

河田九存 通稱要熱田祠の神樂を奉

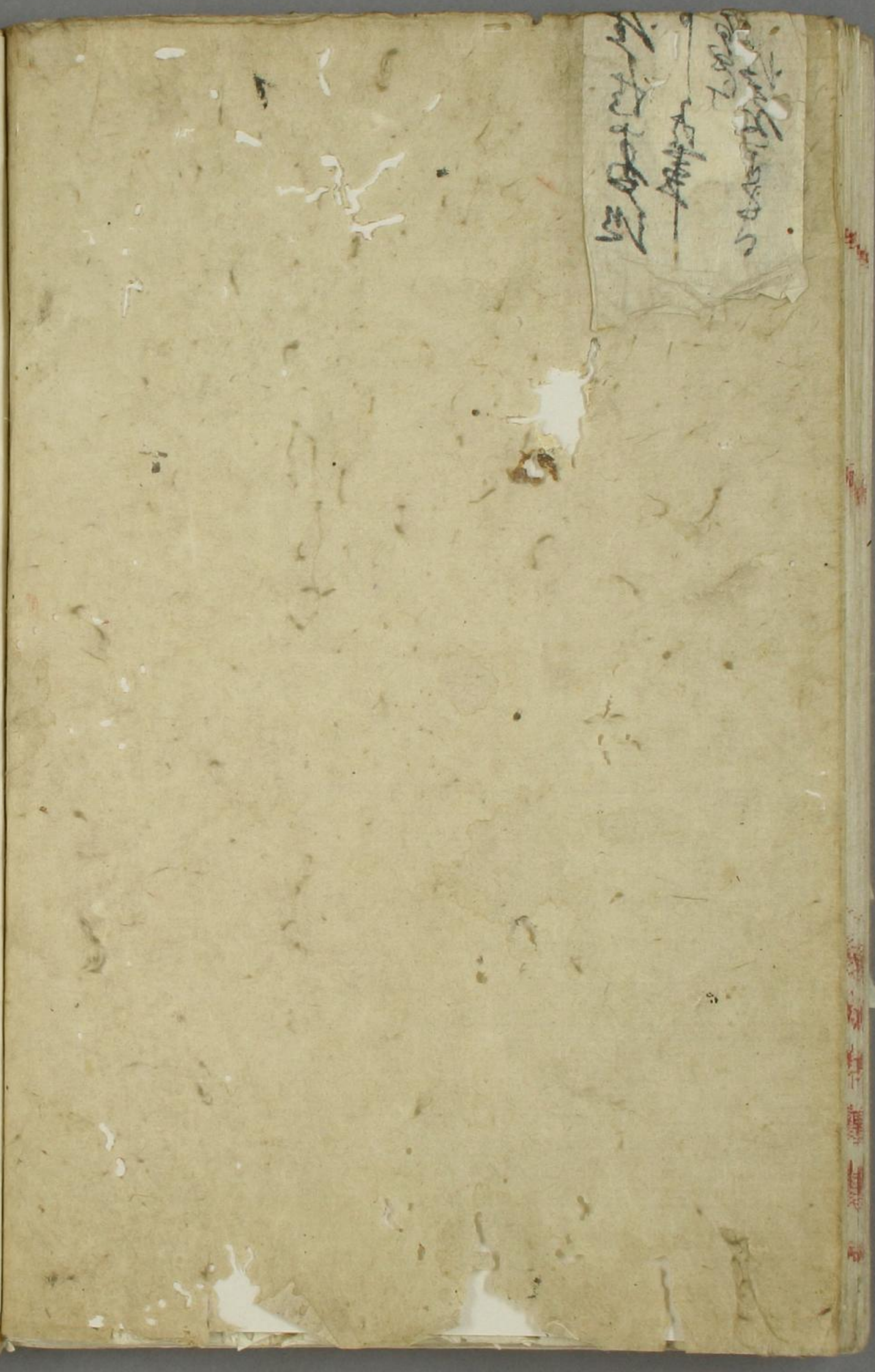
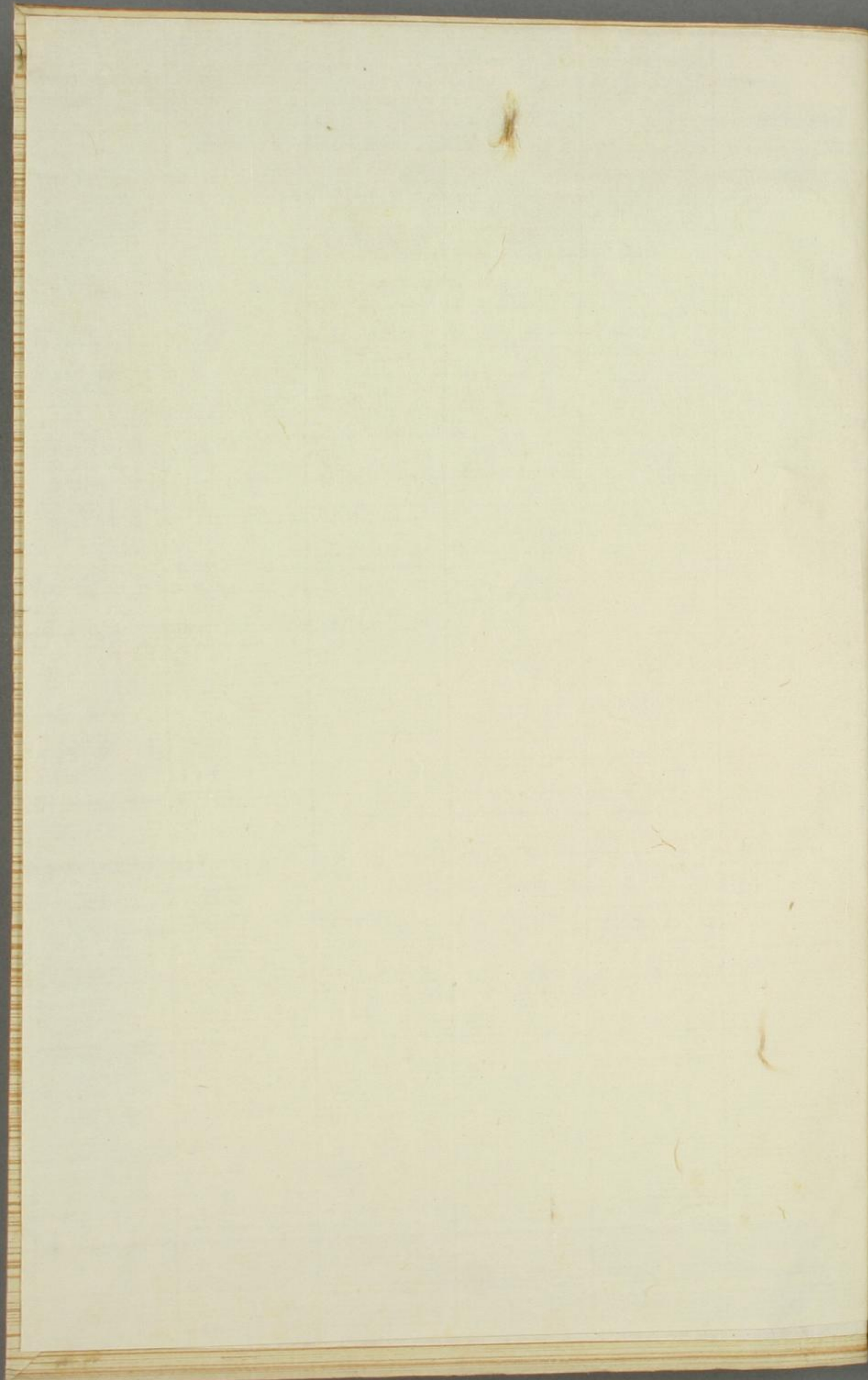
中杉村住居宗年奉圖具及奉八十五

津田尾宗 通稱要熱田祠の神樂を奉





○安政三年リ始ル日中隔立テ修好の事カシキ  
ナリ 再々別紙在る由の公儀バツリテ世々  
ナリヨク之ニ協定ナリ



Handwritten text in Chinese characters, likely a library or collection label. The text is written in black ink on a small, rectangular piece of paper pasted onto the top right corner of the stained page. The characters are arranged in three lines, reading from right to left: 上海圖書館藏 (Shanghai Library Collection), 經部 (Confucian Classics), and 易經 (I Ching).

